

特集

男女共同参画推進月間2016

～みんなイキイキ男女がともに輝く“おかやま”～

11月は岡山県男女共同参画推進月間です。記念講演に加えて、今年も登録団体が企画した講演会や活動パネルの展示、バザー、意見交換会などが行われ、多くの参加者でにぎわいました。

記念講演 2016年11月12日(土)



仕事と家庭を両立しながら第一線で活躍してこられた村木さん。詳しいデータをもとに「女性活躍」の現状と課題を分かりやすくお話しいただきました。苦労した経験をユーモラスに語られる姿に「あきらめない」生き方のヒントが得られた講演会でした。

演題 「誰もが生き生きと働ける社会の実現を目指して」

講師 ^{むらき あつこ} 村木 厚子 さん (前厚生労働事務次官)

少子高齢社会と社会保障

戦後すぐの昭和20年代前半はたくさんの子供が生まれました。いわゆる団塊の世代です。しかし、その子どもたちである団塊ジュニアはそろそろ子どもを産み終える40歳代に突入しており、この後は親になる世代の人口が減少します。社会保障を若い人へも広げることで子どもが増えれば、将来の高齢者を支えることにつながります。年金、医療、介護の財源となっていた消費税は、8%になってから子育て支援にも充てられていますが、10%までは上げないと追いつかない状況です。

生産年齢人口が減りつつあるものの、「高齢者」と呼ばれる65歳はまだまだ若く、発揮されていないパワーがあると思います。「生涯現役」が少子高齢社会を乗り切る一つの力ぎとなるでしょう。

女性の活躍と家事・育児

2016年の日本のGGI(*1)は144カ国中111位です。女性の経済活動や政治への参画度が低いのが順位下降の原因です。結婚・出産で2人に1人が離職し、女性の労働力率は依然としてM字カーブ(*2)を描いています。育児休業や短時間勤務などの制度だけではなく、職場全体の勤務時間が重要です。

共働き世帯は増加傾向にありますが、6歳未満の子どもがいる家庭の男性の1日あたりの家事・育児の平均時間は、日本の場合約1時間、外国は約2～3時間。夫婦で協力して子育てをする家庭ほど、2人目以降の子どもを持つ割合も増えています。

子連れでチャレンジした時代

男女平等といわれていた国家公務員ですが、勤務一日目に係長から「君にお茶くみをお願いしたい」のひとこと。子どもが生まれてからはまたひと山。よい保育ママに巡りあったり、島根に子連れで転勤した時は、「女性課長が子連れで赴任してきた!」とびっくりされましたが、周囲の協力を得て働き続けることができました。娘が4歳の時には1ヶ月の海

外出張の話が持ち上がり、勢いで「行きます!」と言いました。子育て中でどうせ駄目だと思わず、声をかけてくれた上司には感謝しています。

男性も自活していけることが必要です。約半年間拘留された時、主婦が家を空ける大変さを心配してくれる人がいましたが、夫は「今までと何も変わりませんから」と一言。夫が自立していてよかったと思います。

後輩へのアドバイスと心が折れない4つのコツ

仕事、子育て、介護等悩みは多いですが、長い仕事人生の中でずっとそれが続くわけではありません。その時の100%でいい。責任を持って階段を上ると見えてくる世界が変わります。後輩には、「新しいことをやれるチャンスがあれば引き受けなさい」と言っています。専門外のことも経験をしておくと、キャリアを重ねた時に幅が広がります。

私自身が頑張れた理由は4つあります。1つ目は好奇心。2つ目は苦労した経験が役にたったこと。3つ目は気分転換が上手なこと。4つ目は食べて寝られたことです。近くにいる家族や友人の支えと医療や介護のプロの支えがあれば、少子高齢社会も怖くないと思います。

*1 GGI ……………ジェンダーギャップ指数：世界経済フォーラムが毎年公表する各国における男女格差を測る指数。

*2 M字カーブ……女性の労働力率が結婚・出産期に低下し、育児が落ち着いた時期に再び上昇するというグラフの曲線。

